

令和3年度 府立北稜高等学校 学校経営計画(スクールのマネジメントプラン) (実施段階)

学校経営方針 (中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
<p>本校の教育テーマ「国際教育」「環境教育」「表現活動」を相互に関連づけて推進し、グローバルな視野と主体的に生きる力を有する生徒を育成する</p>	<p>■ 3つの教育テーマのうち、「国際教育」はコロナ禍の厳しい状況下でも、オンライン交流や新たな講演会等に活路を見い出せた。「環境教育」「表現活動」では例年以上に充実した取組を実施できたところもあった。環境委員による環境保全活動の取組と教職員によるKES認証の更新をとともに継続することができた。</p> <p>■ 前年度も家庭学習時間数の増加には至らなかった。時間数に焦点を当てた指導から、生徒の学びの意欲に注目した指導にシフトしていくことが課題となる。</p> <p>■ 進路状況については、四年制大学学校推薦型選抜と国公立大学への進学者数において上昇した。今後は、自己の進路目標の実現を、主体的に追求できる力の育成が今後の課題となる。</p> <p>■ 広報は、ツイッターやホームページを通して迅速に展開できた。今後も学校の魅力をより一層アピールするよりよい方策を検討し続ける必要がある。</p> <p>■ 部活動指導は、日々の指導に加え、キャプテン会議等を定期的に関いて北稜高校のリーダーとしての自覚を促す指導を進めることができた。今後も、学校リーダーとしての誇りと自信を育てる指導を継続していく。</p> <p>■ 生徒の自転車マナーに対する苦情は以前より減少し、効果を上げることができた。今後は、ルールやマナーの指導を超えて、自他の命を守る意識を育てる働きかけをおこなっていききたい。</p>	<p>(1) 北稜の魅力伸長</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 特色ある教育活動が数多くあるという本校教育の強みを、「生徒起点」で見直しよりいっそう伸長させる。 ・ 教育の柱である「国際教育」「環境教育」「表現活動」が、「生徒起点」で、より充実感のあるものとなるように見直しを図る。 ・ 地域をフィールドとした課題解決力の伸長を通して、グローバルな問題に挑戦する力を育むという、北稜人材育成ストーリーの構築を目指す。 ・ 部活動、学校行事について、生徒が主体性を発揮し、挑戦する場としての機能を充実させる。 <p>(2) 北稜学習改革</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「主体的・対話的で深い学び」への授業改革、学びにおけるICTの利活用、生徒の学びの道筋の多様性に着目した学習指導等に向けて、組織的に研究・実践する。 ・ 令和4年度からの一人一台端末による学習活動(BYOD)について、試行、研究を行う。 ・ 進路指導における「データ分析力」と「情報発信力」の強化を図り、生徒が自らの学力の伸長を確実に実感することを通して、モチベーションを高め、自らの夢を見だし、高み挑戦していくという、階段状の進路指導スタイルの構築を目指す。 <p>(3) 北稜の魅力発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 中学生の多様なニーズに対応できるという、本校の数多くの特色ある教育活動についての情報発信を、「生徒起点」で見直し、より効果的な発信を行う。 <p>(4) 北稜教職員体制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 北稜魅力推進プロジェクトチームを立ち上げ、生徒、地域(中学生)、教職員にとって魅力ある学校創りに向けた取組を全校体制で推進する。 ・ 教職員自身が生徒のロールモデルとなるように、ICTの利活用、形骸化した業務の洗い出し等を通じた働き方改革を進めていく。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	最終評価		成果と課題
			項目	総合	
教務部	ICTを活用した学習指導の研究を行う	スマートスクール事業や一人一台端末の実施に向けて、ICTを活用した研究授業や公開授業を効果的に実施する。	A	A	ICTの利活用をテーマにした公開授業を全教員で行ったことにより、授業力の向上につながった。2、3月には教科主任会、北稜ICT化推進チームと連携して、1人1台端末を持った状態での授業展開についての研究(公開授業)を行う予定である。
		ICTを活用した授業展開を見据えた校内ネットワークやWifi環境の充実を図る	A		すべての教員が接続設定マニュアルを参考に、自力でタブレットをgiga-edu(wifi)に接続することができた。giga-edu(wifi)側の端末から従来の生徒LAN内の端末へのアクセスに成功した。
教育推進部	北稜の魅力を発信する	「学校ホームページ」の大幅リニューアルによって、全校体制・生徒起点を基盤にした情報発信を強化する。	A	A	「学校ホームページ」のリニューアルによって、全校体制・生徒起点での情報発信の基盤を強化できた。また、学校Twitterに加えInstagramを運用し、SNSを活用した情報発信を積極的に行えた。
		「学校紹介スライド」をリニューアルし、プレゼンテーションを中学生にとってより魅力のあるものにする。	A		生徒起点で、より魅力を感じられる「学校紹介スライド」を作成し、積極的に広報活動に取り組めた。また、コロナ禍での急な変更にもオンラインやYouTubeライブ等を活用して対応できた。
生徒指導部	部活動の更なる活性化を図る	日常の取組をSNSやホームページ等に積極的に掲載し、生徒の充実感や満足感を高める。	B	B	教育推進部と協力し、積極的に情報発信を行った。校内での表彰の形を工夫することで生徒の頑張りの見える化を図ることができた。今後は大会など特別な場面だけではなく普段の活動の様子など積極的に発信できるように取り組んでいく。
		生徒の明るく楽しい雰囲気を外部に発信し、魅力的な学校として次年度の生徒募集につなげる。	B		
	学校行事の活性化を図る	Withコロナの時代に合わせ、新しい形の北稜祭(文化祭)を生徒会中心に企画・運営させ、生徒の達成感や充実感を高める。	B	A	生徒会執行部・委員会が連携を取り有志祭(代替イベント)を実施した。事前準備から当日の運営まで生徒主体で取り組むことができ充実感を増すことができた。今回の取り組みを次年度の北稜祭につなげていく。
		昨年度実施できなかった体育祭を、体育委員会を中心に新しい発想で企画・運営させ生徒の充実感を高める。	A		体育委員会の生徒が準備・運営と大きく活躍した体育祭であった。制限があつた中であつたが、大変充実感にあふれる体育祭であり良い表情をたくさん見ることができた。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	最終評価		成果と課題
			項目	総合	
進路指導部	進路指導における「情報発信力」を強化する	入試システムや共通テスト、類似学部の違いなどの進路情報をclassi等を利用して生徒、保護者に発信する。	C	B	各学校のオープンキャンパス情報や、就職や入試に関する情報などを発信できるよう、準備を進める必要がある。
		進学補習や模試の申し込みや進路希望調査などをclassiを通して行うことにより、家庭で情報を共有できるようにする。	A		ほぼすべてのものについてClassiを通して申し込みを行えた。端末を持たない生徒に関しては、進路指導部の生徒用端末を利用出来るよう解放した。来年度以降、進路行事の振り返り等もICTの活用に励みたい。
保健部	特別支援を充実させる	教務部・学年部と連携し、生徒の状態を早期の段階で把握し、必要な生徒に適切な支援・サポートを迅速かつ効果的に実施する。	B	B	健康課題を持つ生徒に対して、担任や関係者が共通理解を持ってサポートする体制を取ることが出来た。しかし、学校のUD化については、教職員の温度差が課題と思われる。
図書部	生徒起点で魅力ある図書館づくりを行う	情報発信の場として、歳時やニーズにあわせた図書紹介や企画展示、教科との授業連携や取組の成果の展示などをより充実させる	B	B	定期的な図書紹介や企画展示、教科の発表展示により、来館者の増に努めた。教科・分掌と連携した展示・図書紹介を行った。来年度以降の一人一台端末を活用した図書館の取り組みについて先行校に学び、具体化していく必要がある。
		委員会活動を通じて、生徒の目線に立つ企画イベントに主体的に取り組ませることによって、多数の生徒達に図書館の魅力を発信する。	B		選書会や秋の図書館フェスティバルを中心に委員会活動を行った。来年度、本校で実施される京都市・乙訓地域の図書委員会交流会にむけての具体的な取り組み準備が必要となってくる。
事務部	魅力ある学校環境整備を行う	特色ある教育活動の伸張のための取組の幅を広げることができるよう、校内施設・設備の休眠箇所や不備箇所などの改善・整備を図る。	B	B	保管物品の取捨選択を行い整理を進めてきたところであるが、情報共有を今後さらに強化しながら、校内施設全体についてさらなる改善・整備を図っていきたい。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	最終評価		成果と課題
			項目	総合	
第1学年部	高校生活のスタート学年としての基礎を確立させる	生徒の主体性を高めながら、規律ある学校生活の中で、全員が明るく元気に楽しく登校できる学校・学年・クラス作りに努める。	A	B	欠席過多の生徒は学年部で情報を共有しながら、学年としての対応はとれたと考えている。コロナ禍でも挨拶などきちんとした学校生活を送れている。毎年のように一部の生徒で安易な欠席や遅刻が増えており、これらの生徒の指導が今後の課題であろう。
		学校行事や部活動などに主体的に取り組みせ、満足感や達成感を感じさせる。	B		基礎学力の定着においては厳しい生徒も多数おり、進級や進路に向けた対応が今後の課題である。コロナ禍でも、部活動や少ない学校行事は、主体的に取り組んでいた。
第2学年部	生徒が充実した学校生活を送り、主体的に活動できるように働きかける	学校行事における生徒自身の満足度を高めつつ、中核学年としての責任感をもった活動ができるように支援し、充実した学校生活を送らせる。	B	B	コロナ禍の中でも、研修旅行をはじめ、行事を通して学校生活の満足度を高めることができたが、中核学年としての自覚の育成が今後の課題である。
		家庭学習習慣の確立を図り、個々の進路に対応する学力を身につけさせる。	B		個別の生徒への働きかけとともに、学年として進路意識の向上を図ることができたが、進路実現に向けての学習習慣の確立が今後の課題である。
第3学年部	進路選択を挑戦の場と捉え、生徒が成長できる方を主体的に選択できる資質を養う	学校行事を通して、話す、書く、描くなどの表現活動に積極的に取り組み、発信力を身につける。(舞台発表、ポスター製作、スピーチなど)	B	B	遠足、スポーツデー、体育祭の実施により生徒が主体的に活動する場を一定確保できた。コロナ禍における経験不足をどのように捉えて今後にかかすかが課題である。
		生徒へのサポート力向上のために、生徒と教員が双方向でコミュニケーションを図る場を増やす。(面談の回数を増やし会話の質を高める)	B		一定の対話の場を持ち、個々の生徒状況把握に努めた。社会状況の急な変化にもなった議論や意見交換がより必要だと感じている。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	最終評価		成果と課題
			項目	総合	
国語科	<p>・「主体的・対話的で深い学び」への授業改革を行い、生徒の学びの意欲を喚起する。</p>	<p>・定期考査終了後などに自己を振り返る機会をつくり、自分の課題を見つけて自ら解決しようという意欲を持たせるような指導を工夫する。</p> <p>・定番教材の指導方法を見直し、ICTを活用して、生徒が主体的に参加できる授業形態をさらに工夫する。</p>	B	B	<p>定番教材を中心に、電子黒板やClassiを利用したICT利用を積極的に行った。</p> <p>次年度からのロイノート導入などを機に、生徒自身が自己を振り返るツールとしても活用する機会を増やしたい。</p>
	<p>・本校の教育の柱である「表現活動」をより充実感あるものとする。</p>	<p>・文章表現の基礎的な力を養い、他者と協働しながら探究活動に取り組む機会を多く設ける。</p> <p>・コロナ禍で活動制限が多くあるが、感染対策に留意しながら、できる範囲での表現活動を実施する。</p>	B		
地歴公民科	<p>各科目を通じて「国際教育」「環境教育」「主権者教育」の視点を踏まえた授業展開を心がける。</p>	<p>グローバルな地理的・歴史的認識の下、同時代の世界、周辺諸国の動向に注目しながらの授業展開を工夫するとともに、地域社会との関わりのなかで、主権者意識を育み、SDGsの目標達成をめざす教育指導を実践する。</p>	A	A	<p>国内外における諸課題の解決に向けて、各科目の特性を活かして多面的に発問し、主体的・対話的で深い学びを推進することで、課題解決のデザインができる主権者としての資質を養う試みができた。JICAエッセイコンテストや税の作文入賞等の外部評価が育成の成果としてあげられる。今後は課題解決の実践の場としての「地域」との連携を推進し、地域からの評価を得られる方策を開発することが課題である。</p>
	<p>生徒の実態にあわせた「わかりやすい授業」の指導方法と教材の開発に取り組む。</p>	<p>すべての科目において、学習内容の精選を行うとともに、生徒の視点にあわせた教材開発や指導方法(視聴覚教材・ICT活用)を推進する。また、地理総合、歴史総合、公共及び「総合的な探究の時間」の指導方法と教材の開発をICT活用と併せて研究する。</p>	A		

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	最終評価		成果と課題
			項目	総合	
数学科	生徒の希望進路実現に向けて、低学年で基礎・基本を固める。	<ul style="list-style-type: none"> 効果的な課題を教科会で検討し、課題を通して家庭学習を充実させ、小テスト等で知識の定着を確認する。 必要な生徒に対して基礎補充を定期的に行う。 	B		年間30回の教科会議の中で、積極的によりよい授業や課題に関して議論し、実践することができた。基礎補充が必要な生徒に対して、コロナ蔓延時は行うことができなかったが、コロナが落ち着いた2学期後半を中心に丁寧な指導を行うことができた。
	大学入試に対応できる力を育てる。	<ul style="list-style-type: none"> 思考力・表現力・判断力を伸ばす授業展開を教科会や模擬授業を通して研究し、公開授業および研究授業において実践する。 進学補習や朝学習、土曜講座等を通して、大学入試に対応した応用問題に取り組む。 	A	A	合計10回の公開授業・研究授業の実践、教科会議の時間を活用したICT活用研修などを通して、思考力・表現力・判断力を育成する授業展開の実現に向けて積極的に取り組むことができた。朝学習、土曜講座では、模擬試験の過去問題や大学入試問題を取り扱い、生徒の進路実現に向けて尽力した。一方で、模擬試験の結果分析をはじめとした情報共有や振り返りは個々では行っていたが、教科全体としては十分に行うことができなかった。
理科	自然現象への興味・関心を持たせ、授業への集中力を高める。	身近な自然現象を授業で積極的に扱ったり、演示実験、模型、ICT機器を活用したりして、興味・関心を持たせる授業を行う。	A		積極的に模型や電子黒板で画像・動画を示しながら内容を説明した。コロナウィルスの状況が落ちついた時には感染防止対策を徹底しながら実験を行うこともできた。実験ができない時期には、演示実験を行いICT機器を用いて提示したり、動画を使って実験を紹介した。
	日常の学習習慣を確立させる。	年間を通じて日々の授業の重要性を強調する。明確で細かな指示を心がけ、生徒がスムーズに学習に取り組めるようにする。学習習慣の確立のため、課題プリント、実験・実習レポート等を定期的提出させてチェックし、小テストも行う。	A	A	内容理解を促すために、問題演習時には電子黒板と電子ペンを使って考え方を示しながら解説を行った。出席停止の生徒へはzoomを使った授業を行ったり、Classiを使って課題の案内をしたり、授業のサポートと定期考査対策のためにYouTubeで動画による補習を行ったりした。また、定期的小テストを行ったり、問題集の問題に取り組ませて提出させたりして学力の定着を図った。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	最終評価		成果と課題
			項目	総合	
保健体育科	主体的に学ぶ授業の充実をはかり、生徒の学習意欲を高める	ICT機器等を使用し、仲間と相互に協力して課題を見つけたりアドバイスをしたりできるよう指導する。	B	B	仲間と動画を共有して動きを確認したり改善したりする授業展開を試行した。各種目に応じたアプリの活用方法等を研修しさらに試行を重ねる必要がある。
		ICT機器等を使用することで優れている点や改善点など自己の動作を客観的に把握しやすくする。	B		自らの動きを工夫して撮影・観察し、仲間て分析する等の学習方法を試行した。これらを振り返りシートやレポート等にまとめる方法についてもICT機器の活用を試行していきたい。
芸術科	各科目における見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の芸術や芸術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す。	生徒のレポートやアンケートを用いて、目標の設定と振り返りをさせることにより、芸術における諸能力が高まったかどうかを評価させる。	A	B	題材ごとの振り返りやレポート、毎時間の練習記録カードにより、諸能力の高まりを評価させた。Classiの授業アンケートでも諸能力の高まりについて肯定的な回答が多数を占めた。
		主体的・対話的で深い学びの実現に向け、ICTやアクティブラーニングを活用した授業を展開する。	B		生徒の相互評価やグループ学習を実施し、コロナ禍ではあるが、出来る範囲でアクティブラーニングを取り入れた。ICTの面では鑑賞や課題の指示、楽譜の説明において、スクリーンやプロジェクター、iPadを活用した。音楽室、美術室、工芸室のWi-Fiの工事が今年度中に終われば、来年度からロイロノート等も活用したい。
英語科	「国際理解教育」の中心的な教科として、生徒の学習意欲を高め学力を向上させる。	家庭学習を習慣づけの一助として、各学年とも小テストを毎週実施し、1年生から必ず提出物を出すような習慣をつけさせて、学年が進む毎に自主的に取り組めるようにする。	A	B	年度当初から、各学年とも積極的に小テストにも取り組んできた。必須課題の提出を通じて、学年が進む毎に自ら提出できるような体制はとっているが、若干名の未提出が習慣化した生徒の指導が今後の課題である。
		英語検定取得者を増やす。特に、2年終了時までには、アドバンスコースの生徒は準2級、英語コースの生徒は2級取得を目指すよう指導を徹底する。 GTECについては、意欲・目標を持って取り組ませ、スコアアップを目指す。2年時には検定版を実施して、オフィシャルスコアを取得させる。	B		全学年の英検受験者は例年通りで増加しているわけではない(2年の英語人文コースの受験者の割合が高い)が、合格率は高い割合を今まで通り継続できていた。 GTECは1年が実施済みで、2年生の結果はまだ届いていないが、オフィシャルスコアを使用できる準備は整っている。

評価領域 (分掌・教科領域)	重点目標	具体的方策	最終評価		成果と課題
			項目	総合	
家庭科	1人の生活者として自立させる。	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートなどを利用し、理解の程度が自己確認できるように工夫する。 コロナ禍で限界はあるが、出来る範囲で体験的な学習が出来るようにする。 	B	B	今年度もコロナに翻弄されたが、選択科目では可能な限り体験的な活動ができた。観点別評価の改訂に向けて、評価に採り入れやすいワークシートを作成するつもりが時間的に追いつかなかった。
	共生について考えさせる。	<ul style="list-style-type: none"> 乳幼児、高齢者、障がい者等自分たちと異なった環境で生活する人達と、共に生きることについて考えさせる。 体験できない教科については、ICTを利活用するなど工夫する。 	B		乳幼児、高齢者ともにICTやDVD視聴などを利用して、異年齢との共生について一定考えさせることができた。ノーマライゼーションにまで踏み込めなかった。
情報科	机上だけの学習を超えた学びを意識させる。	キーボード利用の修得を目指しながら、ネットワークのしくみ、大きさ、区分などを意識させ、社会への正しい参加態度を意識させながら創造と発信の活動をさせる。	A	A	キーボード利用については、毎時間使用することによって、英数字入力・日本語入力ができるようになった。社会への参加については、コロナ禍におけるニュースを利用して、国や専門家が発する内容を解説した。その結果、情報を考えながら受け止めることが必要であると理解できるようになってきた。

学校運営協議会による評価	<ul style="list-style-type: none"> 地域に開かれた教育課程の実現に向けて、左京区岩倉という地域の持つ力を活用してほしい。本校で取り組んでいる「環境教育」は「地域」とも関連つきやすく、文理を超えた豊かな学びにつながる可能性がある。 生徒起点で学校生活を充実させていくことができている。今後は、現在の高校生たちの、真面目ではあるが主体性の育成が課題であるという特性を踏まえた、意欲を喚起していく教育活動を展開してほしい。それが積み上がることで、希望進路の実現につながればよい。 学びのICTについては、小中学校から習熟した生徒が次々に入学してくる。生徒の可能性を抑え込むのではなく、活用を工夫させることが大切になる。 特別支援の観点、ダイバシティの観点から教育活動を見直していく必要がある。
--------------	--

次年度に向けた改善の方向性	<ul style="list-style-type: none"> 本校の教育的資産である「国際教育」「環境教育」「表現活動」について、生徒起点の魅力化、充実化を進め、本校に入学してきた生徒が本校ならではの教育活動を満喫できるようにする。 地域をフィールドに課題解決力を身につけることを目指した教育活動を、生徒会、総合的な探究の時間、部活動等で展開していく。 特別支援の観点から教育活動全般を見直し、個別最適化と協働的な学びの北稜ならではの体系を作り上げていく。 生徒の潜在能力を引き出す学びのICT化に向けて、全校をあげて取り組んでいく。
---------------	---